

■会員「近況報告・所感・投稿」

(3)「投稿」

高12期 山本輝夫さんから、下記の「読書感想文」をいただきました。

「記録の神様 山内^{イノ}以^ツ九^ツ士と野球の青春」を読んで、双松会（旧松中）の大先輩の神様を知る！
(室^{ムロ}靖治著、道和書院)

高12 山本 輝夫

我らが先輩に「記録の神様」が存在したと知り、驚きと共に、尊敬と誇り、そして敬愛の気持ちで一気に読了。(表紙をめくる前に二礼二拍手一礼)

その人の名は山内以九士。旧松中40期。幼名は育二、やがて生家の戸主名、佐助を継ぐ。著者は孫の靖治氏。

1902(明治35)年、松江市に生まれ、1914年松中に進む頃から彼の最大の関心事は「野球の数字(記録)と規則」で、その後、慶応大に進んでからも、中学と同じく選手ではなく記録係(スコアラ)兼マネージャーとして野球部の門を叩く。

一リーグ時代のプロ野球5,000試合のスコアカードを一枚ずつめくり、一球ごとの動きを確認し、清書していった奇特な人物。一試合を再確認するのに、ソロバンをはじいて検算を繰り返す。清書を終えたのは1971(昭和46)年、亡くなる前年であった。少なくとも一試合一時間としても5,000時間かかったとしたら、気の遠くなる作業で、作業開始から足掛け8年を要していた。

そうした地道な作業の過程で、試合が行われていた当時には、野球人も気づいていない5試合連続本塁打などの埋もれていた大記録が発掘された。野球の記録と規則に生涯を捧げた波乱万丈の70年間。野球の記録と数字に興味を持ち、パ・リーグ記録部長も務め、「プロ野球の陰の功労者」とも言われた20年間。「数字は人をだまさない」が口癖で、信念でもあった。

慶応大を卒業した山内は帰郷。松江の関係者には頼りになる存在だった。発足したばかりの県中学校野球連盟の常務理事にも就任。慶大野球部選手を呼び、松中野球部を指導させた応援が実って、松中は翌1923(大正12)年「全国中等学校野球大会(於：鳴尾球場)」に念願の出場を果たし、堂々のベスト4に輝く大活躍。

1932(昭和7)年に開場した旧松江市営球場の建設には設計の段階から工事まで、神宮球場の図面も取り寄せるなど深くかかわった。幼名の「育二」をもじったペンネームの「以九士」の“九”は野球のナインを意味し、野球を“以”って生きる“男”、とほのめかしていた。

そして、1942（昭和17）年春、日本野球連盟から関西担当の公式記録員になって欲しい旨の要請が寄せられ、山内は松江を後にするという生涯で最も大きな決断をする。1942年3月発行の「ベースボールニウス」は、「職業野球春の巻頭号」で一ページを割いて山内の公式記録員就任を特集し、その紹介文には「野球の記録と規則の研究に没頭し、野球の理論家にして当代一流の知識を持ち、慶大当時は家を忘れ、親を忘れて野球に献身し、温厚篤実な人柄は選手に沈黙の激励を与えていた。同君が連盟の公式記録員として新任することは、日本野球界に一権威を加え、益するところも多大であることを期待する」とあった。

今年には日本に野球が伝わって150年の記念すべき節目の年で、山内という縁の下の力持ちを軸に、日本プロ野球の「青春時代」を描いた秀逸の書に出会えたのは本当に嬉しかった。スーパーマンの異名をとった“神様、仏様、稲尾様”の稲尾和久投手始め、球界伝説の名選手たちが、その数字、歴史とともに紹介されていてなつかしい。

日本のプロ球界を見ても、佐々木朗希投手の「28年ぶり最年少連続奪三振記録と完全試合達成」や、村上宗隆選手（年末の『今年の新語、流行語大賞』に断トツで選ばれ“村神さま”に決定した事はご存じの通り）の日本人本塁打記録更新となる56号や、米大リーグでは二刀流の大谷翔平選手が“野球の神様”ベース・ルースを超越する数々の記録など、若い選手の活躍する姿や記録ラッシュに元気を貰った人も多かったのではないかな。

山内が1972（昭和47）年に心不全で亡くなった際の葬儀には、プロ野球関係者が多数訪れ、長嶋茂雄氏、王貞治氏からの弔花も届けられた。生前は長らく固辞していたと言うが、1985（昭和60）年、特別表彰として野球殿堂入りを果たした。いずれも、山内の足跡の大きさを物語っている。

私も、記録（数字）の産みの親とも言える以九士大先輩を偲び、その持つ“深み”と“厚み”、そして才能に加えてのご本人の“努力量”に敬意を払い、一層興味を持ってみたい。“だんだん”

2022年10月10日記



同書より